

昆虫類相の概要

本県は県土の約 82%が森林で、しかも標高 0 mの低海拔地から標高 3000mの山岳地に及んでいるため、暖地性から寒地性まで変化に富んだ豊かな植生が見られる。また、美濃地方の低地には沼地やため池が、東濃地域の丘陵地には湧水湿地が多く、飛騨地方には高層湿原や池沼が多いなど、湖沼や湿地環境も豊富である。このため、水生植物に依存している昆虫類やトンボ類に代表される水生昆虫類は多種多様で、種類も多い。

本県の昆虫相は蝶類とトンボ類はほぼ解明されている。しかし、蝶、トンボ類以外は甲虫類の一部とガ類の調査が比較的進んでいるものの確認された種数の解明率は低く、このほかの仲間についてはほとんどわかっていないというのが実情である。

本県で確認記録のある昆虫類は、前回（2001）の調査で約 5,600 種が把握され、我が国で記録されている昆虫類約 300,000 種の約 19%に過ぎないと報告した。その後、若干確認種は増えているが、ほとんどが前述した調査の進んでいるグループであることから、解明度は依然低レベルで推移していると思われる。これは県内に昆虫研究者やマニアが少ないのが大きな原因である。

選定種の状況

今回のレッドリスト見直しにあたり、高山帯や湿地帯を中心に現地調査を実施した。また、昆虫研究者や昆虫マニアから情報を入手したり、意見を聞いた。それらの資料を参考に昆虫専門部会で検討した。その結果、絶滅 4 種（初版 0 種）、絶滅危惧 I 類 28 種（11 種）、絶滅危惧 II 類 28 種（16 種）、準絶滅危惧 77 種（54 種）、情報不足 33 種（32 種）の計 170 種を選定した。初版に比べ 57 種が増加した。これは情報量が増えたことも一因であるが、それ以上に森林伐採や河川工事などの大規模開発や地球温暖化の影響で昆虫類の生息環境が悪化しているからと考えたからである。このうち、大きな改善点は、初版に比べカテゴリーの上がった種を 42 挙げたことである。この中には、絶滅を 4 種含ませた。逆にランクを下げた種はわずか 4 種で、初版と同ランクの種は 42 とした。また、今回新たに選定した種をみると絶滅危惧 I 類が 11 種、絶滅危惧 II 類が 5 種、準絶滅危惧が 40 種、情報不足が 26 種である。このうち、高いランクの絶滅危惧 I 類を 11 種選定した。

前述したように本県には昆虫マニアは少なく、しかも特定の分野に集中しているため、今回も初版と同じようにトンボ類、甲虫類、チョウ・ガ類を主とし

た選定となった。それも記録の少ない種や生態のわかっていない種が多く、こうした種の中から選定する評価基準については意見が分かれた。このため、昆虫研究者や県内の昆虫マニアからの意見も取り入れて判断した。このうち、特に、評価を判断する過程で大きく意見が分かれたものは次のものである。

① 絶滅種の取扱

今回、絶滅を4種挙げた。ここでは、絶滅したという確証が明確ではない、翅があるのだから県外から飛来してくるという可能性、台風で運ばれることもありうるなどの意見があって繰り返し論議された。しかし、文献調査で30年以内の記録が欠けており、県内外の多くのマニアが長年にわたって捕獲を試みているにもかかわらず、30年以上全く採集の記録がないことなどから絶滅とした。

② ヒメギフチョウの取扱

岐阜県高山市平湯（旧 上宝村平湯）に分布するヒメギフチョウが論議の対象となった。当初、ヒメギフチョウは、ランクを絶滅にすることが検討された。しかし、現在、当地において生息しているものを絶滅にすることに対する多くの意見がでた。昆虫部会では、1960年代に採集された平湯標本を調べ、現在保管されている標本の所在を明らかにした。また、10年以上の空白期間をおいて1980年代以降に採集されるようになった個体との比較も行った。さらに、遺伝子レベルでの差を見るため大学へDNA解析の依頼も行った。当地で再捕獲されるものは、以前のものとは異なり、他地域のものが放されたことが明白である。1960年代の個体が生き残っていたとしても遺伝子攪乱が起こっていると考えられる。多くの研究者、マニアは、平湯個体群が絶滅したというのが主たる意見である。しかし、今回のレッドデータは、あくまで個体群を扱うのではなく種としての扱いにするとの結論に至った。従って今日、平湯地域に当種が棲息している以上、絶滅とはせず、初版と同じランクの絶滅危惧I類にした。

③ 高山性昆虫の取扱

レッドデータ初版において高山性昆虫は、特別保護地区に生息しており、厳しく採集が禁止され保護されているので減少する恐れはないと判断された。そのため多くの種は選定対象から外されていた。今回の改訂で高山性種の扱いが論議された。今日、地球温暖化が生物に与える影響が懸念されている。氷河時代の生き残りである高山性昆虫は、その影響を最も強く受ける種群である。長野県など高山を有する県においては、高山性種が重視されており、本県においても高山性種を見直すことになった。過去のデータと今回3年間に渡る調査データのもとに高山性種を大幅に増加させた。

④ 希少種の取扱

レッドデータの選定種は、もともといた種が環境の変化によって絶滅の危機にどの程度瀕しているかで決められた。かつては県下に広く分布していたが、今は局地的であるとか、個体数が多かったが、激減したという種である。しかし、中には日本で岐阜県のみ記録とか、県下で数頭の記録あるいは産地が1か所と言ったものもある。これらについては情報不足あるいは継続調査をして次の改訂時に検討するという意見と、このような貴重種だからこそレッドリストにして保護すべきだという意見に分かれた。議論の結果、今回は特に貴重性の高いものを上げることにした。また、中には昔はたくさんいたけど現在は激減してほとんど姿を見ることができない貴重種となっているものもある。しかし、当時の文献が少なく確認記録による比較ができない場合は、聞き取り情報などを加え状況判断でランク付けした。

⑤ その他

レッドリストの選定とは直接関係ないが、厳しい意見もでた。このような手法で作成したレッドリストがどこまで種の保存に反映されるか、特定の分野の昆虫に限られているのが問題ではないか、あるいは現地調査をしていないがこれでよいのか、少なくとも絶滅危惧Ⅰ類の現況だけでも詳細な調査をしておくべきではないか、などである。特にこのレッドリストが何に利用されているかが問題になった。野放図な開発抑制の歯止めだったらよいが、ともすれば貴重種だから採集しては駄目だと間違った方向へ進みかねない。マニアが捕虫網で採るくらいは問題ないことを明記できないかとの意見が一部のマニアからあった。

昆虫類は非常に種類が多い。しかし、本県における昆虫研究者やマニアは年々減少している。しかも、そのマニアは人気のある特定の分野に集中しているという現況の中でレッドリストを選ぶのは極めて難しい。今回、難産ではあったが見直し作業を終えることができ、前回よりは良い選定ができたと思っている。しかし、前回と同じようにほとんどがトンボ類、チョウ・ガ類と甲虫の仲間である。やはり、岐阜県のレッドリストであればせめてハチ類、カメムシ類、バッタ類など身近な昆虫類は加えるべきであろう。

昆虫類各種のページはこちら

http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11264/sizen/red_data2/insect.html